

〈翻 訳〉

エミール・レーデラー, エミー・レーデラー・ザイトラー
『日本－ヨーロッパ』第6章(その1)

貫井 隆・舟木 徹男

1. 訳者まえがき

エミール・レーデラー(1882-1939)は、東京帝国大学でも教鞭をとった戦前ドイツの世界的な経済学者・社会学者である。前号に引き続き、彼が妻エミーと共に著した日本社会論『日本－ヨーロッパ－変容する極東』を、翻訳する。底本としてはドイツ語版 *Japan-Europa Wandlungen im Fernen Osten* (1929)¹⁾を用いる。なお、ナチを逃れてアメリカへ亡命した後に刊行された英語での改訂版 *Japan in Transition* (1938)²⁾も適宜参照する。〔 〕内の語句は、訳文において訳者が補ったものである。

今回訳出するのは、第6章「極東の国、中国」である。本章はかなり長いので、全体を3分割し、今号では最初の1/3を訳出する。今号の範囲は貫井が下訳を作り、その後、全体にわたる訳文修正作業を共同でおこなった。

2. 翻訳『日本－ヨーロッパ』

第6章 極東の国、中国(その1)

ホッブズは「リヴァイアサンとしての国家」というイメージを作り上げ、この際立ってヨーロッパ的な権力組織の本質を白日の下に晒した。〔しかし〕現代ヨーロッパの群衆－大国 *Massen-Großstaat* の、あらゆるものを包括する強烈なリアリティは、ホッブズによるこの恐ろしいイメージをはるかに凌駕している。どれほど目立たず、取るに足らず、控えめな人間でも、何らかの仕方で片隅に隠れ、この遍在する装置の鉗子から逃れることはできない。しかし、破壊不可能に思えるこの装置が構築される何千年も前から——近代的

で官僚的な群衆－強圧国家 *Massen- und Zwangstaat* が成立する何千年も前から——ヨーロッパ人の生活は国家志向のものではあった。たしかに、彼らの生活様式は、家族集団の中で社会的に形成されたものではある。とは言え、これらの集団はどこにいても国家的な形態を——すなわち、内に向かっては組織化し、法秩序によって強制し、外に向かっては主権を主張し、権力欲と本能によって作動する、公的な形態を——目指していた。

古代ギリシアでは、私たちは最初から、小さな「国家」に出くわす。独自の軍隊、王、集団、階層を有する一連の小さな主権的存在を、ホメロスはすでに紹介している。このような小国家は、どれも覇権を目指し、本質的に拡大志向である。逆に、拘束し合併せんとする強国の力が弱い場所でも、国家なき状態が現れるわけではない。その土地は小さな、最小の主権へと分裂するだけである。ヨーロッパは無数の領土間、権力間の闘争のなかで引き裂かれており、超宗派的な発想で一時的に調和的共存の可能性を見出すことはあっても、何世紀にもわたり、一方における分裂と、他方における包括的覇権への吸収との間で、あてどなく揺れ動いている。国家 *Nation* という概念は、絶対君主制によって準備され、資本主義の市場によって初めて真に実現された。見たところ、こうした国家概念だけが、〔一方では〕最小単位への分裂に最終的な歯止めをかけ、他方では、ヨーロッパの地における巨大帝国の成立を防いできた。1800年時点でのドイツの地図を見てみるといい。封建的な構造から抜け出し、工業化が迫り、資本主義が発達し、西欧の大国、特にフランスとイギ

リスという〔近代国家の〕好例があったにもかかわらず、ドイツは何十、何百もの主権に分裂したままで、それらの領土は乱雑に入り乱れ、さながら散在耕地のように断片化され、あらゆる組織化、あらゆる統率と対立し、また、民衆の力のあらゆる理性的構造と対立し、「自然な交わり *natürlicher Verkehr*⁽¹⁾」の法則とさえ対立している。ヨーロッパ大陸全体が大混乱に陥っており、一平方メートルたりとも争われない土地はなく、無害きわまりない一市民の私生活でさえ、国家権力の野心の対象となっている。称賛的となる〔プロイセン国王〕フリードリヒ2世⁽²⁾の国家でさえ、自国民や外国人の「臣民」を騙して兵役に誘い、彼らに自発性が見られなければ捕えて無理強いし、兵舎の壁の中に入れた途端、残忍な暴力でもって奴隷にし、彼らの自発性を育てるのではなく、それをへし折る（「兵士は敵よりも将校を恐れなければならない」⁽³⁾）。〔プロイセン以外の〕他の国々では、戦争に必要なでない場合は、臣民を他国の君主に売ってしまうことさえある。18世紀までドイツの諸部族が耐えてきたこの専制政治——無意味で、互いに消耗し合うだけの権力闘争——に相応の結果は、救いのない混沌の中での国家の形成と滅亡であった。上昇と下降、覇権と崩壊の繰り返し。それはまるで、一族の栄枯盛衰と同じである。絶対的権力をもつ君主でさえ、貴族を抑えつけたとはいえ、足元に少しでも強固な地盤を見つけたにすぎない。しかし、後の国民国家と同様、こうした絶対君主もまた、〔中国の場合のように〕物事が落ち着いて進展する時代をもたらすことはできなかった。これらはいずれも、外見上は穏健なものに見えたとしても、完全な強圧のシステムなのである。というのも、これらの国家形態は、〔中国とは異なり〕どれも静的ではなく、変動こそが、それらの存在法則であるからだ。権力増大こそ、それらの行動の血肉をなす動機なのだ。

〔ドイツでは以上のような有様だが、〕それに對して、極東では別世界に出くわすことになる。

中国は遠い昔、封建的な構造を有していた。私たち〔ヨーロッパ人〕は、この封建制が崩壊し、識字階級が支配するようになる様子を、いわば外

から眺めているだけであり、内に働く力を未だに把握していない。たしかに、それは、純粋な美德と公正な心による支配では決してなく、非常に人間くさく、過度の腐敗や恣意性さえも伴う支配である。しかしそれでも、武人、つまり肉体的に優れているだけの者、「強い男」でしかない者を軽蔑する、ある種の文人性を具えている。この点で、中国的精神は、きわめて独自の路線を走っている。ヨーロッパにはそのようなものは一切ない。〔中国における国家とは、〕一つの国民的まとめ、世界国家であり、まさに、既知の全世界——あるいは少なくとも、中国が重要だと見做す世界の全て——を包み込む存在である。それは、何世紀にもわたって、外部へ侵攻しようとする衝動も、権力欲もなく、いかなる種類の拡大をも明確に拒否してきた。力を乱用する者はみな同類とみなされる。強盗と兵士は同じ穴のムジナである。軍司令官と海賊も同じ性質を持つと見なされる。ヨーロッパの精神は、権力そのものの周辺に、つまり愚鈍な拳骨 *geistlose Faust* の周りに、あらゆる栄光を織りなしてきた。その栄光のすべてが、中国には不在なのである。

中国史のなかでも、私たちにとって最も身近な〔古典〕時代においては、拡大衝動が見られない。このことは、自国の文化を称揚し、見知らぬ「野蛮人」を軽蔑し、世界の進捗に干渉せず進行するに任せるという志向とも関連する。このような態度は、ある種の傲慢さを生み、外交政策に無関心になりやすい。そのため、大規模な外交活動が行われることはほとんどない。〔漢王朝の黄金時代〕（*Rosthorn*⁽⁴⁾による表現）と称される武帝⁽⁵⁾の時代がそうであった。武帝はカスピ海周辺地域にまで進出したが、武帝による襲撃——本質的には、その地域の主要勢力であり、中国をしばしば脅かしていたフン族との戦闘——は、実効的な支配を確立するというよりも、緩やかな保護国を形成し、貢納の義務を課しているだけにしか見えない。〔漢王朝のような〕巨大帝国でさえ、これらの事業〔外部侵略〕で消耗していたのである。ある有名な例では、タワン⁽⁶⁾産の馬の貢ぎ物を奪うために、大規模な懲罰的遠征隊が送られた！武帝（後の〔後漢の〕明帝も同様だが）のこの政策がいか

に的外なものだと判断されたかは、次のことから明らかである。民衆の困窮に直面した武帝は、在位最後の年に、勅令の中で自らの政治の誤りを告白し⁽⁷⁾、民衆の赦しを請い、戦争をやめ、方士を追放し、税を引き下げたのだ（Rosthorn による）。武帝は、世界のタオを乱さないこと、積極的な活動によって世界の理に反しないことを最大の目的とするという、政治の基本原則に明らかに立ち返ったのである（本書第5章を参照）。後の時代に、中国は一度だけ日本にまで手を伸ばそうとしたことがあり——それは朝鮮半島からは（それもクビライ・ハン⁽⁸⁾の政権下であれば）容易なことであった——また、一度だけ南へ——ビルマ⁽⁹⁾、コーチシナ⁽¹⁰⁾、スマトラ、ジャワへ——進出しようとしたが、失敗に終わった。こうして見ると日本とは好対照である。日本は常に積極的で、非常に早い時期から何度も朝鮮半島の征服を試みていたからだ。中国は、その国家の性格を象徴するように、モンゴルによる侵略を防ぐため、4000kmに及ぶ万里の長城を築いた。そのための「軍備費」は実際、防御にしか役立たなかった。また、中国は（前述の例外的な遠征が失敗した後に）チベットにまでその支配を拡大したが、それは、本質的には、常に名目的な保護領〔化〕に過ぎなかった。というのも、そこでは、チベット仏教のラマ〔上師〕の精神的影響力が相当大きいからである。たしかに中国は、ある種の自惚れから、自身の支配範囲こそ世界の全てと捉え、その国境や文化圏の外にいる人々を哀れんでいた。そしてその「宇宙論的な」捉え方の中で、全世界を原理的に自己に隷属するものと見ていた（de Groot による）。しかし中国は、実際に〔外国に対する〕影響力を行使しうる場合であっても、形式的な貢ぎ物で満足し、外国の君主からの贈り物 *Geschenke* を「貢ぎ物 *Tribute*」という呼称で——これは見え透いた詭弁なのだが——表現することを好んだ。このことはまた、自国民に対する支配力を強めることにもなった。中国の国民は、外国の使者が自国の宮廷儀礼を守ることを、中国への敬意として受け取ったからである。

こうした外交政策の消極性は、概して、中国社会の安定的状態に対応したものであった。〔一般

に〕社会的闘争によって引き裂かれた人々は、外国〔との闘争〕への転嫁や領土拡大によって階級闘争を克服したり、あるいは、外国の介入を誘発したりすることが多い。しかし、中国が膨大な闘争、流血、騒乱の末に作り上げた社会システムは、ほとんど永続的とも言えるものになっている。というのも、外部からの干渉を受けないかぎり、それ自体を変化させる傾向を全く見せないからである。ただしそうは言っても——誤解のないように今一度強調しておくが——中国人自身が、平均的ヨーロッパ人に比べて「平和主義的」であるというわけでは決してない。平均的中国人は激情家であり、実際、彼ら自身、激昂しやすいという困った性向を自覚している。喧嘩を厭わないし、いざ喧嘩が始まれば、容赦なく応酬を繰り返す。中国人は何が自分の利益になるかを弁えており、純粋に理念や倫理観だけに生きることは決してない。たしかに「最低限の倫理観」が求められるとはいえ、そもそも、家族の利益優先〔という中国的な原則〕が、個人としての道徳性向上を強く制限している。このように、儒教的な倫理観が存在するとは言っても、個人は、道徳の原則を常に行動指針にするわけではない。しかしそれでも、国民全体のあり方は、社会システムとして、微動だにせず安定している。それは、個人の危険な力を束縛し、概して、個々人の情熱、野心、権力欲から生じるあらゆる緊張関係を自ら解消することができる。その意味で、ある種の平和的システムを構築している。外部に対する平和主義を促進しているのも、道徳原則に大きな比重が割かれているからでは必ずしもなく、このシステムの社会的な均衡による。こうした均衡の取れる社会システムにおいては、道徳的統治が国家政策のイデオロギーとして可能となる。

紀元前2世紀から19世紀までの「古典」時代の中国國家は、安定的な支配および権力の均衡を維持したが、これはヨーロッパ國家のどのタイプとも似ても似つかない。すでに述べたように、それ〔紀元前2世紀〕以前の中國で支配的だったのは封建的システムである。その後、激しい戦いの末、封建制とはまさに正反対といえるもの、すなわち、學者や文人、古典教育を受けた者、儒教の

紳士の理想を体現する者による支配が確立された。彼らは剣や華やかな制服を誇示することなく、孔雀の羽で身を飾り、ゆったりとした衣服をまとうて悠然と歩き、暴力を嫌悪した。これらの文人たちが（およそ紀元前 200 年頃から）中国における実質的な権力の担い手となったのであり、その威信は今なお衰えていない。

この国家体制は、学者が指揮をとるにもかかわらず、それでも国家として組織された世界の中で非常に現実的な考え方をするという、一見奇妙な現象をもたらしている。当時、この君主制国家は、地球上で最強の力を持っていた。にもかかわらず、暴力、権力、支配のイデオロギーを自ら生み出すことはなかった。君主が行使する暴力を、彼自身が神聖視することはなく、暴力は依然として悪と見なされた。その考え方の根底にあるのが、世界の穏やかで自然な運行への信仰、つまり「道」（タオ）の信仰である（本書第 5 章を参照）。この信仰によれば、支配者の統治を導くべきは、無意識的な衝動の力だけである。「彼の行動を支配するのは、計画性や意志の力であるべきではない。したがって、何か大きいことをやってやろうという野心も持つべきではない。物事の自然な流れを、決して乱してはならない」（de Groot による）。「泰然としている者こそ、皇帝である」（『Ji⁽¹¹⁾』第 1 巻、第 5 章、de Groot による）。この考え方は今なお通用している。資本主義の台頭とともに、この考え方が無力な思想になったことは、日を追うごとにいよいよ明瞭である。なにしろ 19 世紀には、それはもはや単に自発的な受動性ではなくなっているのだから。そして何より、身の回りの世界が流動性を増す中で、「タオ」は壊れてしまった。タオは「良い統治」さえあれば、復活するのだろうか。それは中国的な観点から見ても疑問である。

〔さて、〕中国とは対照的に、ヨーロッパの諸民族は、キリスト教の存在にもかかわらず、いやむしろキリスト教の名のもとに暴力的なイデオロギーを作り上げ、西洋騎士の姿の中に、「剣と謙虚さ」という逆説的な組み合わせを見出した。そして、封建制を教会システムにまで高め、宗教改革や個人の魂の高揚の中にさえ、国家、つまり組

織化された暴力へと回帰する道を見出した。ヨーロッパ人は権力へと引き寄せられ、露骨な暴力、あるいは場合によっては、崇高な理想でもって正当化された暴力の虜となることを繰り返してきた。純粋な人間的心情に発する道徳を重視するような正義と美徳が、自らの力を活用するにとどまり、反抗する者を厳格に「男らしく」屈服させることができないのであれば、そうした正義と美徳は、ヨーロッパ人にとっては何の意味もない。

それに対して中国の賢者たちは、流れるような衣服をまといながらも、支配力を保持する。彼らは決して剣に手を触れることがない。さらに言えば、中国の賢人は決して権力に仕えることはない。〔一方、〕ヨーロッパの国家は、暴力の結晶、剣による秩序、武装した者たちの堂々たる集合体であるにとどまらない。それ以上に、その根底には〔そのことを正当化する、暴力的な〕イデオロギーがあり、それによって何千倍も、精神的に支えられている。ヨーロッパの国家は、精神的な称揚によって生きながらえている。騎士という存在は、騎士に同調する詩人や学者なしには成立しない。

こうしてヨーロッパの国家は、単に屈強で暴力的な者たちの国家であるだけでなく、常に知的な上層階級の国家でもあり続けた。知識層は国家を〔暴力的な人々と〕共に作り上げ、その基盤を築くだけでなく、国家を何度も精神的に再生させてきた。とくに現代の大国は、大衆の精神的な支配なしには成り立たない。それゆえ大国では、知的階級は、ほとんど余す所なく「国家」に吸収されている。

一方、中国では——この点がヨーロッパと異なるわけだが——資本主義が始まる以前から、支配者は知識人であった（もっとも、無政府状態や督軍⁽¹²⁾の専制、空位の時代においては、その支配は何度も途切れたが）。彼らの支配は、しばしば腐敗し、搾取的で、自己利益のみを追求するものではあったが、それでもヨーロッパの封建的支配、つまり農民を農奴にまで貶める「農民の後援 Schirmherrschaft der Bauern⁽¹³⁾」とは大きな差がある。知識人が支配する中国の国家は、たとえ搾取や腐敗が横行したとしても、費用のかさむ〔統

治] 機構を築かなかったため、静的な農民経済の利益に合致していた。というのも、農民は生まれながらにして武人に対立しており、封建的搾取の永続的な対象となることで自ずと平和主義的性格を持つに至った。そして、どんなに腐敗していても戦争をしない知識人、特に宗教的基盤をもつ知識人による体制を、きらびやかで名声のある武人階級の支配よりも常に好んだ。したがって、穏やかで「無為」なる統治という理想は、農民の利益に何より適っていた。もっとも、ほかならぬ中国において、この農民の利益が貫徹されたのはなぜなのか、という疑問は残る。その過程で農民が積極的な役割を果たしたかどうかは、少なくとも、非常に疑わしい。

〔中国の〕封建制が衰退した決定的な理由は、今日でもまったく明らかになっていない。おそらく、より集約的になった農業と大規模な灌漑設備によって、農民は自らの土地の管理を強いられるようになったのだろう。封建領主は——もちろん激しい戦いの末に——帝国の官僚に取って代われ、領主領は行政区画となり、帝国は、皇帝の絶対的な支配のもとで（国家権力の及ぶかぎりの土地が）中央集権化された。したがって、これは、封建制度が旧帝国の解体を引き起こしたドイツや、封建制度が中央集権的な国家権力の基盤となった日本とは、全く対照的である。〔中国の〕絶対的な皇帝制度においては、支配力を持つ宮廷貴族は出てこなかった。むしろ、権力はその後、儒教の文人たちに引き継がれた。とは言え、中国の官公吏が、西欧の官僚制のような行政機構を形成したわけではない。中国の官僚は、職務に就くために、それに直接関係する専門教育を受けるわけではない。むしろ、古典的な教養が完全に身につけているかを問う、入念にレベル分けされた一連の筆記試験を通じて、就労の資格を得る。文学的教養のある者こそ絶対に優れており、あらゆる職務に対応できるとみなされたのだ。その際、官僚たちには魔術的な力があると信じられていたことも一役買った（マックス・ウェーバーの説）。それがために、完璧な文人的教養さえあれば、平時にはすべてが「上手くゆく」と信じられた。しかし、このイメージの他にも決定的な要因があ

る。官僚たちのもつ古典的教養の知識は、さまざまな状況でどのように行動すべきかを示す規範の宝庫なのだ。さらに、行政や政府の実務で彼らに関わる人々も、同じ規範に従って行動するため、規範についての知識は最低限必要というだけでなく、仕事に不可欠なものだった。ここで非常に重要なのは、教養を持つ者、つまり古典的な儒教教育を受けた者だけが、政治的交渉や行動に必要な表現手段を用いることができた、ということである。書き言葉と公的な文体が、中国においては、部外者には乗り越えがたい壁として立ちちはだかった。逆に、公的な表現手段を使いこなせる者は、それだけですでに上層階級の一員に数え入れられ、文人階級と連帯して自らの人格形成や意志形成を行ない、彼らの仲間入りを果たした。書き言葉や、特に文体を操る能力がもたらす排他性は、突破し得ないものであり、實際上、非常に大きな意味を持った。ただし、この関係の詳細については、ここでは立ち入らない。

規則へのこうした従順さが、戦略にまで及んでいることは、いかにも中国らしい。ある戦いで、ある中国の指揮官が、雨天時には休戦する義務があるという古典的な考えに従わず、奇襲をかけて成功した。そこで、奇襲された側が「規則違反だ」と異議を唱えたところ、その指揮官は動揺し、元の場所に引き返したそうである（もっとも、これは単なる作り話かもしれないが）。ちなみに、これは〔西洋における〕中世の騎士道の戦闘規則に似ているが、その規則は、スイスの農民や傭兵たちの「卑しい」戦術によって時代遅れのものとなった。閉鎖的な社会、つまり、社会的権力を画一的に行使する社会は、いつでも容易に「慣例」を生み出す。しかしこの慣例は、〔一般的には〕新しい階層の台頭によって乱れてゆく。新階層は神聖視されてきた伝統に、もはや敬意を払わないからだ。〔ところが、中国のような〕閉ざされた階層が支配する領域ではどこでも、常に基準となる形式や伝統が貫徹される。それは特権を生み出し、〔閉じた階層の〕内部での承認を通じて、その特権は保護される。

＊

それゆえ、「古典時代」（紀元前2世紀以降）の

中国では、混乱期を除けば、支配層はヨーロッパのように血縁によって結びついていたわけではない。ヨーロッパでは、〔特定の〕家系が権力の座に、特に国家的・政治的な権力の座にしがみついている。これらの権力の座は当然ながら経済的基盤も持ってはいるが、単なる経済的な権力よりも永続的であるからだ。というのも、〔ヨーロッパでは〕封建的な領主権やギルドの親方職のように、政治的基盤がある場合でもないかぎり、経済的な権力の座は、常に新たに獲得されなければならないからであり、〔他方で〕政治的・国家的な権力は、暴力によって維持されることもあるからだ。〔しかし〕紀元前2世紀以降の中国では、単に古い家柄であるからという理由だけで政治的な影響力を持つ家系は存在しない。

もちろん、日本と同様に中国でも家系や氏族には一定の地位がある。それは伝統的に与えられた地位であり、また、財産に基づいた地位でもある。しかし、家系がヨーロッパ的な意味での公共的役割や、国家権力を担うことはない。つまり、(ヨーロッパの封建制では当然のこととされている) 統治者たらしとする志向性がないのだ。そのため、中国には貴族も存在せず、「一族の栄光 *splendor familiae*」を保護する公権力もない。逆に、どの一族も何もないところから日の光の中に現れ、その力が衰えると、その輝きも色あせていく。たとえば日本のように、国が特定の家系を支えてくれる、ということもない。(中国の諺に「苦力から苦力へ。三代にわたって」⁽¹⁴⁾というものがある。)

それゆえ、ともかくも実力だけがものをいうこの世界では、誰もがまず学問に勤しみ、国家試験に合格することによって、政治的地位を獲得しなければならなかった。しかし、その資格が——最高難度のものであっても——保証する資質は、ヨーロッパで公的生活を営む「偉人」に要求される資質とは大きく異なる。国家試験が証明するのは、創造力 *ingenium* よりもむしろ忍耐力と勤勉さである。獨創性は中国ではそれほど高く評価されなかった。それでも政府がうまく機能したのは、前述のように、一方では社会制度、他方では中国文化の特性によるところがとくに大きい。こ

のように、ヨーロッパ的な意味での個人能力は、たとえ高官であっても要求されない(柔軟性、状況に臨機応変に対応する能力、自律性、冷静な判断力は、あっても当然とされたが)。それでも、必要な資格は、まさに誰もが自助努力によって獲得する必要があった。偉大な学者の息子であっても、そのままではその地位を継承することはできず、自ら業績を積んで地位を確保しなければならない。祖先の功績は子孫に利益をもたらさない。むしろ逆に、息子や孫の功績が先祖に光を当て、先祖は、優れた子孫を育てた功績を評価される。著名な人物の父親や祖父は、死後であっても地位が上がる。それに対して、ただ父親が偉大だからといって息子を優遇することは、中国の考えには全くなじまない。血統が人の資質を決めるわけではないからだ。

それゆえ、大勢の文人たち、何万人もの学識者たちが、上層階級を形成している。しかし、その構成員は絶えず変動しており、個々人は基本的に自らの地位を自分自身で確保し、成功を重ねることで維持しなければならない。なぜなら、失敗の責任は決して民衆ではなく常に上層階級に帰されるからだ。帝国の政府が高官の異動を頻繁に行っていたのは、そうした考えに基づいていると理解できる。高官がある地域に根を下ろし、その地域で氏族ごと一権力に成長するということはあってはならない。〔また、〕中国では省ごとに話される言語が大きく異なるため、高官たちは現地の住民に直に接する機会がまったくなかった場合も多かったであろう。よって、彼らは文人同士の交流に頼らざるを得なかった。こうした上層階級の構造それ自体が示すのは、中国的「国家」——これについては後段で扱う——がヨーロッパ的な意味での国家と全く異なるものであり、高官たちの役割もまた、ほとんど「行政」と呼べるものではない、ということである。

〔中国には〕封建体制に対応するかたちで、「臣民」に対して支配関係に立つような、そうした〔ヨーロッパ的な〕封建階級は存在しない。そのため、中国の村落(現在も人口の大部分は村落に住んでいる)を、例えば中世ヨーロッパの村落と比較することもできない。また、スイスのような

農民民主主義の村落と比較することもできない。スイスでは、村落は州（カントン⁽¹⁵⁾）として、常に一種の「国家的性格」の形成を目指していたからである。

中国の村落制度も、学識ある上層階級の組織と同様、独自性を備えている。実際、中国において特徴的なのは都市ではない。たしかに、中世ヨーロッパの城壁を遥かに凌ぐ長大な城壁を持つ巨大都市は、中国の景観を印象深いものになっている。南京や北京の城壁に比べれば、ニュルンベルクやピサの城壁はおもちゃのようなものだ。しかし、マックス・ウェーバーが言うように、中国は都市の国ではなく、村落の国である。都市は文化の中心、活発な商工業の中心ではあったが、村落こそ、その独特な地位を保ち続けている。農業は最も尊重される職業であり、農民が「下賤の者Kerl」と見なされることはなかった。彼らは独自の世界を生きた。たしかに、重税や乱世、盗賊に悩まされることも多く、帝国の行政システムがそれらを解決してくれることもなかった。それでも、ヨーロッパの農民のように辱められたり、社会的没落を経験させられることはなかった。〔バートランド・〕ラッセルが中国に関する著書〔『中国の問題』³⁾〕で正しく述べているように、「この村落制度は、その原始的で窮屈な生活条件にもかかわらず、そこに生まれた人々（今日でも大多数を占める）に対して、何世紀にもわたり、王朝の変遷に影響されることなく、おそらくヨーロッパのどの社会的組織よりも多くの幸福、安定、充足をもたらし、保証してきた」。なぜそんなことが可能だったのか？その理由は、中国農業の安定的な環境にある。大規模な土地を所有する場合でも、それは複数の小作人に借地として分け与えられ、〔一人の所有者による〕大規模経営になることは滅多にない。さらに、小作人の借地は実質、世襲されることが多かった。それどころか実際は、省によっては、小作人が労働に基づいて土地の共同所有権を得ることさえ認められている。加えて、家族の絆は、互いを束縛する面もあるが、それは支えでもある。これらのことが経済的安定をもたらし、それは村から村へと波及していく。こうして、この民族全体に、平時は平穏が

もたらされる。その中で、人々は仕事に精を出し、充実した家族生活を営んでいく。

村の社会秩序には、道徳的理念や倫理の原則を何より大切にする、ある思想体系が対応している（このことは別の論点にも繋がるが、それについては、またの機会に詳述する）。この思想体系において、道徳の原則はどこかに貼り出される見栄えのよい標語、イデオロギーであるにとどまらない。それはある意味、本当に現実的、本質的なものとして個々人が引き受け、生きるものである。これは、中国人が生まれながらに温厚で道徳的だからというよりも、人々の組織の中にこうした倫理観が深く根付いているために起こる。大きな家族単位で構成されるのが中国社会であり、人は家族から独立して存在することはできない。そのため、家族の中に、ある種の生活上のルールが生まれ、それは何よりもまず〔親に対する〕孝順を求め、さらに家族間の結束を求め、経済的・人間的な連帯を求める。家族は、同時に経済的単位でもあり、個々の成員は家族の規範に従うことにより、彼らの生存に必要な精神的支柱を獲得する。家族は、家族全体への服従と適合を強いる。家族は個々人の生存を保護するものの、その代償として、数々の義務を並べ立てた完全な目録を作り、〔個人には〕ごくわずかな権利しか認めない。

この点でも、ヨーロッパの社会制度との強い対照性が見られる。ヨーロッパの家族は、生活上の共同体として存在しているにもかかわらず、家族の成員は経済的には一体でなかったからである。ヨーロッパの個人主義とその経済的な表れである自由放任主義は、そうした基盤の上でこそ発展を遂げることができたのだ。

中国では、この社会と国家の構造全体を支える家族関係システムに対する反乱は、私の知る限り、一度も起きていない。自由な出世の機会が用意されているおかげで、社会的空間は広く、野心的な人々には大きなチャンスがあったからだ。何と言っても、優れた人材収集を可能にしたのが勉学であった。勉学こそが権力への道であり、また富への道でもありえた。それゆえ、家族の中からその道を切り拓く者を輩出するためには、家族はどんな犠牲も厭わず援助した。そのため、中国で

は家族や氏族の束縛が強いにもかかわらず、社会の本体には広範な柔軟性が見られる。これは、階級間の移動がなく、よって社会構造の維持に厳格な規律が必要とされた日本とは異なる。〔中国では〕家族や村のシステムに馴染むことができず、かといって社会的にも出世できない者は、社会から追放される。その多くは、どんな階級にも属せない者として、やくざ者の集団に流れ込む。他に行き場などあるだろうか？しかし注目すべきは、これらのやくざ集団でさえ、個々の成員の結束を強めるための集団精神を育てている、ということである。(次号に続く)

訳注

- (1) もとは『新約聖書』の「ローマの信徒への手紙」第1章26-27節にある、男女間の「自然な関係(交わり)」の意味⁴⁾。ここでは、ドイツが何百もの領邦に分裂していて、他国なら可能な各地域同士の「自然な交通」が、ドイツでは不可能である、との意味に転用しているか。
- (2) プロイセンの君主(1712-1786)
- (3) フリードリヒ2世の言葉。
- (4) ロストホルン(Rosthorn, Arthur, 1862-1945)は、オーストリアの外交官、中国学者。
- (5) 武帝(紀元前141-紀元前87)は、前漢の第7代皇帝。匈奴に対する軍事遠征などで、大帝国を築いた。
- (6) 不明。現在のインドのアルナーチャル・プラ

デーシュ州に位置する地域か。

- (7) 武帝は征和4年(紀元前89)、輪台罪己詔を出した。罪己詔(ざいきしょう)とは、古代中国の君主及び日本の天皇が自らの過ちを反省し、政策を変更するために出した自己批判を示す詔書の一種。
- (8) クビライ(忽必烈, Qubilai, Khubilai, 1215-1294)は、モンゴル帝国の第5代皇帝、元朝の初代皇帝。
- (9) 現ミャンマー。
- (10) コーチシナ(Cochinchine, 交趾支那)は、フランス統治時代のベトナム南部地域を示す歴史的な名称。
- (11) 不明。
- (12) 督軍(軍の司令官)。
- (13) 不明。
- (14) 出典不明。
- (15) カントンは、スイスの行政区画。

文献

- 1) E. Lederer, E. Lederer, Seidler. 1929 "Japan-Europa Wandlungen im Fernen Osten" Frankfurter societäts-druckerei g.m.b.h.
- 2) E. Lederer, E. Lederer, Seidler. 1938 "Japan in Transition" Yale University Press.
- 3) ラッセル, B. 1971 (1922)『中国の問題』牧野力訳, 理想社
- 4) 共同訳聖書実行委員会・日本聖書協会訳・佐藤優解説, 2010『新共同訳 新約聖書Ⅱ』文春新書